



Title	竹本一流懐中本について
Author(s)	大橋, 正叔
Citation	語文. 1974, 32, p. 80-92
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68625
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

竹本一流懷中本について

大 橋 正 叔

一
浄瑠璃の段物集といっても祐田善雄氏の御指摘^{注1}の通り、その用途に応じて「絵入本、献上本、半紙本、懷中用の横本など多種多用」である。竹本筑後掾の段物集で生前に刊行されたものについてみても様々な書型のものがある。その中で量質とも代表とすべきものは正徳元年初秋刊の『鸚鵡ヶ袖』であろう。半紙本上中下三冊、筑後掾の自序、門弟連名、近松の跋を有し、所収段物九十番は筑後掾の語り物の集大成の感がする。出版書肆はその正本を終始刊行してきた山本九兵衛・山本九右衛門である。刊行の正徳初年に強いて格別の意を見出せば筑後掾六十一の賀をみるが、浄瑠璃本でのかかる記念出版の例を他に知らない今推測にとどまる。こうした立派な装幀をもつ段物集には、宇治加賀掾の（東京芸大本は自筆識語さえもつ）『竹子集』自序にみられような、
惣して浄るりほど下輩なる物のやうに人にいやしまるゝハなし。
是皆ミつから芸をあさまにしなしたるゆへなり、既浄るりを能語り得てハかたしけなくも口宜をいたゞき諸国の受領に任ぜらる。
いつれの音曲にかゝる事やある。

といった矜持に似たものが感じられる。『大竹集』にしても自序自筆署名をした大本で装幀も立派である。義太夫の「貞享四年段物集」も大本の立派なものであったと聞く。これらの段物集は正しく太夫直本の段物集であり、その自序には我一流の里程を示す意が強く込められている。浄瑠璃の興隆発展期を自ら創り出した加賀掾・筑後掾にとって自分の手で段物集を刊行することは、自らの浄瑠璃に対する姿勢を示すに恰好のものでありよき宣伝の具でもあったろう。しかし、他方、太夫のそうした意を含まない携帯に便利な小本の段物集も出まわっていた。浄瑠璃にそうした小本の段物集を広めたのは西鶴である。

『小竹集』（貞享二年七月）の序文で西鶴は「大竹集を求めて明暮是を見しに懷中のならざるを用捨して節章を改め小竹集に移しぬ是なん小ハ大を叶へる一冊也」と小本にした理由を述べている。この刊行の意図について藤井紫影博士は「曆」（西鶴作）との関係から此作（筆者注「曆」）は小竹集以外のすべての段物集には全く影を見せない。それから考へると、此作は加賀掾にとつては最初大阪で語った時、義太夫の賢女手習并新曆の為に競争に敗れた不吉な思出もあり、且はさして面白い作でもないので、敬遠の体であつ

たかと思はれる。西鶴はそれが不平で、どうだ俺の淨るりを見る
といふ意込で、自作宣伝のために特に作ったものゝ如く、加賀掾
の段物集がすべてつば屋や山本の手から出てゐるのに、これのみ
が西鶴の著書を出した森田庄太郎の開板であることも、此間の消
息を伝ふるものでなからうか。(中略)で此小竹集は加賀掾が編
集して西鶴に序を頼んだものでなく、西鶴が勝手に撰んで出版し
たものであること、猶西沢一風が加賀節を集めて浄瑠璃加賀羽二
重を作ったのと同様であらうと思ふ

との見解を示しておられる。加賀掾生前の段物集は多く自序や印記
を有するに比して、『小竹集』には加賀掾の名は序文にでるだけで
あり、加賀掾がその編集に直接間接に関与した形跡を示すものが全
くない。藤井博士の卓見は首肯されるべきであらう。このことは単
に段物集に小本が生じたというだけでなく、太夫に關係なく享受の
側から必要に応じた段物集をつくり得たことになる。「曆」に対す
る自負に加えて、西鶴は「好き者のけいこ用」により便利に「嘉太
夫の口まねして月待下舟小風呂のうち」で楽しむに似つかわしいも
のを必要としたのである。そのために小本が求められた。このこと
に対する文言はないが、従前の段物集が自序をのせ、それが『竹子
集』にいう座敷浄瑠璃の慰みのための口伝であつても、そこに浄瑠
璃の芸に対する太夫自身の至情があるのをみれば、加賀掾にとつて
こうした小本の出現は好ましからざることであつたらう。しかし、
浄瑠璃そのものが享受範圍をひろめたことは認めねばならない。こ
の西鶴の試みは好評を博したらしく、翌貞享三年七月に『新小竹集』、
十一月に『千尋集』と、共に『小竹集』に倣った体裁で加賀掾・義太
夫の段物集が出版されている。そして、この懷中用小本は元禄末頃

から横型小本のものに移り、一時期竹本一流懷中本と称される段物
集が多種刊行される。この横小本の懷中本について今迄個別に取り
上げられ言及されたことはあつたが、その成立、性格等についてま
とまつた発言をまだ聞かない。この度『浄瑠璃花月丸』(信多純一
氏蔵)を借覧し、この種の段物集に新たな一本を加えることができ
た。これを機に竹本一流懷中本について私見を述べてみたと思う。

二

『浄瑠璃花月丸』(正本屋九左衛門板)の惣目録のあとに左のよう
な広告がある。

竹本一流懷中本出来分

- | | |
|----------|-----------|
| 一 淨るり見取丸 | 一 淨るり小菊丸 |
| 一 竹本秘伝丸 | 一 淨るり連理丸 |
| 一 淨るり酒妻丸 | 一 竹本二朱一部 |
| 一 竹本宝来山 | 一 淨るり大かどみ |
| 一 竹本宝鑑 | 一 淨るり花月丸 |

(以下書名の記述は淨るり・竹本の語をとり簡略にする)

同様な広告は右にのす「秘伝丸」「連理丸」にもあるが、ここに
掲げている書名に加えることができるのは「略上るり」の一本であ
る。表題の竹本一流懷中本の呼称も「花月丸」に倣つたのである。
これらの書は「花月丸」の板元である正本屋九左衛門板(以下西沢
版とする)で刊行されたはずであるが、管見の範圍で所在を知り得
たのは「花月丸」「見取丸」「秘伝丸」「連理丸」の四本と山本九右衛
門板(以下山本版とする)「小菊丸」の計五本である。なお、右の広
告に書名はみえないが『浄瑠璃当流小百番』(自序「当流浄瑠璃小

百番』『浄瑠璃拍子扇』『竹本極秘伝』（原本未見）も同種同体裁の懷中本段物集である。「小百番」「拍子扇」は山本版、「極秘伝」は西沢版である。これらの書名が右の「花月丸」等の広告にみえないのは、「小百番」「拍子扇」は山本版ゆえであらうし、「極秘伝」は後述するように「花月丸」等より後の刊行だからである。しかし、この判断した場合、同じ山本版の「小菊丸」が西沢版「秘伝丸」「連理丸」「花月丸」に広告されるのはなぜかという疑問がのこる。広告にだけ頼るならむしろ「小菊丸」は西沢版とすら思われる。ところが「小菊丸」には筑後掾の序があり、小ぎく丸・ミとり丸・ひでん丸此三艘の道行揃へ予が秘密のふし章の規矩を以て、是を正し集め山本版に板行に彫しめ、音曲の海をわたる楫棹とする所に、頃日あしれぬ類船出て、書の題号をとり付て正本をかすむといへどもふし付に至りて、天地雲泥違ひある故、是をなげきて直本といへる舟印に序を加へ、猶証拠のため予が判形を相添て、高麗はし壱町目山本丸兵衛店にして是をうらしむ、ただいつわらざる所をしらしめんとなり 竹本筑後掾と「小菊丸」だけでなく「ミとり丸」「ひでん丸」も山本版行させたと言明している。これは「小菊丸」に西沢版を考えたのと同じように現存の「見取丸」「秘伝丸」が西沢版であることと齟齬する。現存の書はその板元まではっきりとしているので、このままではこの矛盾は解決しない。そこで考えられるのは山本版「見取丸」「秘伝丸」、西沢版「小菊丸」の存在の想定である。もし、それが立証できればこの複雑な問題も簡単に説明がつき「小菊丸」の序の意味もはっきりする。しかし、そうした本を知らない今それを立証することはできないが、少くともそう考えてよいと思われる論拠がある。

以下その点について述べたく思うが、それと共にこの問題の前提にも当る「小菊丸」筑後掾序文の吟味をしておきたい。

「小菊丸」は既に指摘されている（『未刊浄瑠璃芸論集』）ように序と目次の標題以外は同じ山本丸兵衛から出ている「小百番」と等しい。正確にいえば、「小百番」の筑後掾自序と浄瑠璃凡例を省き右に引用した筑後掾の序を新たに加え「浄瑠璃小菊丸」と外題替した再版本である。そう断定するのは「小菊丸」（京都大学類原文庫蔵）の丁附が「小百（丁数）」となっており、これは「小百番」（東京大学教養学部附属図書館蔵）の丁附と一致するからである。又、その書体・字配りの一致は両書を比べれば判然としている。そして、このことは「小菊丸」の跋に筑後掾の「山本を山木と一点を偽きて世人の目を閉ぐ事誠によしなき事也」と山本版に対する批難の文のあるをもって、この序も山本版に対するものでないかとする見解を消極的なものにする。何故なら、この跋文は同じ山本版の「小百番」「拍子扇」にも共通するものだからである。その板木も同じものとみれるので跋文はむしろ従来のものを形式的に附与したとみるべきであらう。これに反し、「小菊丸」の序は独自のものであり既に跋文で述べているのと同じような批難を序跋共に筑後掾の名で並べるのは異常である。「小菊丸」が「小百番」の再版本でありその相違が序文にあるならば、「小菊丸」を「小菊丸」たらしめているのはむしろこの序文といふ。この書の刊行の意味もその辺りにあったのではなからうか。ところで、この序のいう所にはかなりの真実性がある。傍証として序にいう「直本」に焦点を絞り山本版と西沢版を比べると、それ／＼の内題左下の太夫名の所は次のようになる。

山本版「小百番」 竹本筑後掾直正本

「拍子扇」

「小菊丸」

西沢版「見取丸」 竹本筑後掾正本

「秘伝丸」

「連理丸」 竹本筑後掾直享

「花月丸」 竹本筑後掾直伝

「極秘伝」

筑後掾伝受丸

山本版が「直・正本」と統一されているに反して西沢版では表記の仕方に苦心の程が窺える。西沢が山本の後塵を拝していた例として筑後掾しか書けない「貞享四年義太夫段物集」の「浄瑠璃大概」が「秘伝丸」に少し整理され「浄瑠璃口伝書」として、又、「小百番」の「浄瑠璃凡例」が「極秘伝」に少し見易くされ、いずれもそのまま取り入れられていることがあげられる。ここにみえる表記の不統一もそうした苦労、つまり筑後掾の直本らしくみせるための苦労の表われかと思われる。こうした点を考えれば「小菊丸」の序は直接西沢版と名指しはしていないが、西沢版が批難の対象に入っていることは間違いない。では、具体的に山本版と西沢版がどのような関わりをもつのが問題となるが、それを示唆しているのが「拍子扇」と「秘伝丸」の関係である。左に両書の目録を掲げる。

浄瑠璃拍子扇（山本版）

竹本秘伝丸（西沢版）

①甲賀三郎 諸天づくし

①甲賀三郎 諸天づくし

②同二段目 かねいへ道行

②同二段目 かねいゑみち行

③同三段目 ゆめのいろ町

③同四段目 へあふみ八景

④同四段目 あふみ八けい

④十二段之 へうつゝのわたし
二段目 守

⑤信田小太郎 神おろしのたん

⑥同四段目 小ぎく姫道行

○かけ物ぞろへ 小百番ニ在

⑦十二段之一 うつゝのわたし

段目 もり

⑧百日曾我 けいせいたいな

○けいせい請状 ○とら少将道行

○ぜんじ坊三ぶ経 ○かせん

右四色小百番ニ在

⑨曾我五人兄 とら少将矢立の

弟 杉

○小袖もんづくし ○つゝハもの

ぞろへ

○とら少将道行 ○かたミぞくり

右四色小百番ニ在

⑩新版腰越状 若くさ姫道行

⑪藍染川 初段梅名よせ

⑫同三段目 弁の君道行

⑬遊君三世相 二段目さんげ物

⑭同三段目 ミこの口よせ

⑮同四段目 はるひめ道行

⑯天智天皇 三段目三社たく

せん

▲四季段▲道行見取丸に有

⑤信田小太郎 神おろしの段

⑥同二段目 へおとしなきため

⑦同三段目 へ小ぎくひめち行

▲かけ物ぞろへ小菊丸に有

⑧新版腰越状 若草姫ミち行

⑨藍染川 へ初段梅の名寄

⑩同三段目 へ弁の君道行

⑪百日曾我 へけいせいたいな

いさがし

▲けいせい請状▲とらせう／＼

道行

▲ぜんじ坊三部経▲かせんのだん

右四色ハ小菊丸と申本に有

⑫遊君三世相 へ二段目さんげ物

語

⑬同三段目 へミこの口よせ

⑭同四段目 へはるひめ道行

⑮同段 へふみぐるまの段

⑯曾我五人兄 へとらせう／＼矢

弟 立の杉

▲小袖のもんづくし▲つは物ぞ

ろへ

○びじんぞろへ○花てる姫道行
右二色ハ調子竹ニ在

○うねめ四きハ小百番ニ在

17以呂波物語 いろはのまへ道行

○しゅらんぎよくハ小百番ニ在

18世継曾我 ミかりせいぞろへ

19同三段目 とら少将十はん

きり

20同五段目 ふうりうの舞

○けはひさか○とらせうしや

う道行

右二色ハ調子竹ニ在

21盛久 ほうしやうかく

道行

22同五段目 げんじ大けいづ

○馬ごうた○地ごくあとき

右二色ハ調子竹ニ在

23悦賀案平太 大名やくめ付

24虎石三段目 とらおもひぶミ

○とら御せん道行ハ調子竹ニ在

25根元曾我 兄弟ノはう道行

○おとこぞろへハ調子竹ニ在

26薩摩守忠度 きくのまへ道行

○一の谷名所ハ調子竹ニ在

▲とらせうく道行▲かたミお
くり

右四色も小菊丸と云本に有

17天智天皇 三段目三社たく

せん

▲びじんぞろへ○花てる姫道行

右二色ハ見取丸と云本に有

▲うねめ四季物語ハ小菊丸ニ有

18以呂波物語いろはの前道行

▲しゅの乱曲ハ小菊丸に有

19世継曾我 べミかりせいぞろへ

20同三段目 べとらせうく十

ばん切

21同五段目 べふうりうのまひ

▲けはひ坂▲とらせうく道行

右二色ハ見取丸と云本に有

22盛久 べげんじ大けいづ

▲あけぼの馬小うた▲地ごくの
あとき

右二色も見取丸にあり

▲道行ハ竹本二朱一部と申本に有

23悦賀案平太 大名の役目つくし

24虎が石三段目 べとらおもひぶミ

▲とら御前道行 見取丸に有

25根元曾我 べ兄弟のはミち行

○太刀の銘つくしハ小百番ニ在

27一心五戒魂 小はる文づくし

28同五段目 もんがくちざう舞

○木づくしハ小百番ニ在

○かはるひめ道行ハ調子竹ニ在

曾根崎心中 壹段浄瑠璃

男ハ夜明のちしこを松の木の嵐

女ハあかつきのかねしゆろの

木のつゆ

作者 近松門左衛門

〔目録標題の番号は漢数字を
アラビア数字にかえた。〕

右二書共に二十八番所収中傍線をつけた三番以外はその曲目が一

致する。「拍子扇」は十四行本(但し「曾根崎心中」は十二行で本

文冒頭に全一段を載せている)、「秘伝丸」は十五行本と板式は全く

異なり所収部分にも長短の異なりがあるが、曲の配列目録の書き方

等は類似している。又、右目録から山本版では「小百番」「調子竹」

「拍子扇」、西沢版では「小菊丸」「見取丸」「秘伝丸」がそれく

三書で一組をなしているといえる。このうち「調子竹」については

▲おとこぞろへ 見取丸に有

29薩摩守忠度 べきくの前ミち行

▲一の谷名所つくし見取丸に有

▲太刀の名づくし 小菊丸に有

30大曾我 べおにわうどう三

郎ミち行

▲時宗三部経ハ見取丸に有

31一心五戒魂 べもんがく上人

ぢざうまひ

▲木名づくしハ 小菊丸に有

▲かはる姫道行ハ見取丸にあり

右之外古来新浄るりのあたり所

見取丸に廿七ばん小菊丸に廿六

ばん有但シ此秘伝丸ハ右ふた色

ニおちたるをひろい又ミ板行し

て世の重宝となすこと予が才覚

にあらずや

未知の書であるが、他の書はその曲目の一致から既にあげた書指す。但し、「小菊丸」は西沢版のものと考えられ現存の山本版と異なると思われるが、目録にみられる曲目については山本版も同じである。そして、これら二組の書は「拍子扇」と「秘伝丸」だけでなく、「小百番」と「小菊丸」、「調子竹」と「見取丸」と共に掲げられた曲目は一致する。「調子竹」「小菊丸」(西沢版)は伝存を知らないでそれぞれと「見取丸」「小百番」との比較検討ができず結論は出せないが、それ／＼が山本版と西沢版とで対応する書でなかったかと思われる。そこで現存の書をもってすれば、「小百番」は「小菊丸」と外題替されて山本から刊行されているので、「小百番」「調子竹」「拍子扇」を「小菊丸」「見取丸」「秘伝丸」と「小菊丸」序という三書に見立てることができる。

或いは「小百番」「調子竹」「拍子扇」が一组となっているので、「小百番」が「小菊丸」と替えられたように「調子竹」「拍子扇」が「見取丸」「秘伝丸」と外題替され山本から刊行されたかも知れない。逆に「小百番」刊行後「見取丸」「秘伝丸」「小菊丸」が出され、その後「小百番」の連れとして「調子竹」「拍子扇」が出たともいえるが、「小百番」「見取丸」「秘伝丸」が「小菊丸」に先行し、しかも「小百番」が「小菊丸」と外題替し一組の三書が出来上っている時点で、わざわざ／＼そうしたことを行うのはかに再版改題本の多い当時といえども不自然である。又、「小百番」の筑後掾自序に「せちに望まれて既に三帖となして、当流淨瑠璃小百番とえぼし名づけをはんぬ」とあることから、三帖の残り二帖を「見取丸」「秘伝丸」と想定し「小百番」以前にそれらが刊行されていたとも考えられようが、それならば「見取丸」「秘伝丸」「小百番」を一組

とすべきで「小百番」「調子竹」「拍子扇」を一組とすることに對して説明がつかない。山本版「見取丸」「秘伝丸」を確認できないでこうした穿鑿は無用とされるかも知れないが、「拍子扇」と「秘伝丸」(山本版)の先後を検討することは他の懷中本の成立年次にも関係してくるので無視することはできない。又、仮りに「小菊丸」序という山本版「見取丸」「秘伝丸」が「調子竹」「拍子扇」の西沢版に對する見立だけであつて、実際には刊行されなかつたとしてもこの吟味は必要である。何故なら、この仮定をするにも「拍子扇」が「秘伝丸」(山本版)より先に出たとする結論が前提となるからである。いずれにしても現存の西沢版「見取丸」「秘伝丸」に類似の「調子竹」「拍子扇」が山本版で刊行されており、さらに山本版「見取丸」「秘伝丸」が出版されていたとしてもそれは「調子竹」「拍子扇」の後に刊行されたものであるということが出来る。又、「小菊丸」序や「秘伝丸」目録の奥書に「此秘伝丸ハ右ふた色ニおちたるをひろい又ミ板行して世の重宝となすこと予が才覚にあらずや」とあるによつて西沢が山本版を真似たといえよう。こう考えるならば同じように西沢版「小菊丸」があつたとされなければならない。その点についても確証はないが、西沢版の他書に宣伝があること、その広告に「小菊丸一冊廿六番出来」とあるにその番数が山本版「小菊丸」の二十四番と合致しない(「見取丸」の広告については現存の板と一致)こと等から刊行された可能性は十分考えられる。以上のことから、山本・西沢両版の類似した三本がそれ／＼刊行され西沢版は山本版の亜流であつたといえる。そして、こうした西沢版の存在が筑後掾や山本側を刺激し、「小百番」をことさら「小菊丸」と西沢版と同名に外題替し刊行させたのではないかとすら思え

る。そうみれば跋文序文共に他板を批難する文を筑後掾の名で載せた異常さが理解されはしないかと思われる。

こうした出版上の相違を考えれば、同じ懷中本といえども本質的な相違があるといえるが、しかし、これは刊行の側（太夫の側）の問題であり、享受する側にとっては共に同じ筑後掾段物集である。二書肆のものを比較しても節章墨譜に質的な相違はない。ただ厳密には竹本一流懷中本の呼称は西沢版の書のみに適用されることになる。

三

懷中本における前述のような二書肆の問題の因を探る前に、これらの書の成立刊年を先に検討しておきたい。

(1) 「小百番」（山本版）東京大学教養学部附属図書館蔵

自序の末尾は「当流淨瑠璃小百番とえぼうし名づけをはんぬ。このとしこの月三陽の半、花果敷榮し、黄鳥の声あやをなせり、時なるかなこれこの時」と結ばれている。三陽は易の卦の三つの陽爻をいい、易の泰卦䷊は三陽が下にあつて消息卦によれば正月に当り新年の意とされる。『翰墨全書』は「元旦、三陽交泰（節序門）」をのす（『大漢和辞典』）。又、『古周易経略解』には䷊の卦は「正月之卦也」とある。さらに「黄鳥」は鶯の異名（『類船集』）で初春に詠まれることが多い。よって正月に書かれたとすれば筑後掾受領（元禄十四年五月）後の元禄十五年一月以降を指す。又、「津市史」によれば元禄十五年八月八幡祭の芝居で筑後掾等により「曾我五人兄弟・百日曾我・天鼓」が上演されている。この曲目は「小百番」の所収順位の前三曲「百日曾我・曾我五人兄弟・天鼓」と同じである。ほゞ

この頃に人気のあつた曲であつたと思われる。この公演が地方巡業であることを合せ考えて、以上のことから「小百番」は元禄十五年初春頃の刊行と推定される。尾崎久弥氏は『甘露堂文庫稀覯本攷覧』で「大磯虎稚物語」を最新曲とされ元禄末か少くとも宝永元年以前とされているが、その上演を元禄十五年五月廿八日とされたのは明和版「外題年鑑」によつており、義太夫正本存在によりそれ以前の上演が十分考えられるので、この論拠はそのまま採用できない。

(2) 「拍子扇」（山本版）東京大学教養学部附属図書館蔵

「曾根崎心中」を冒頭に全曲のせている。しかも目録では番外に掲げ作者近松門左衛門の名まで記している。（目録参照）。他が十四行本であるのに「曾根崎心中」は十二行の板にし字も大きく見易くしているのは、既に準備されていた板に「曾根崎心中」の人氣が予想外であつたので新たに加えたものと思われる。なお、第一番目の「甲賀三郎」は明和版「外題年鑑」によれば宝永元年四月十六日上演となつており、所収曲の中で一番新しい曲である。この書についても尾崎久弥氏の考証があり宝永元年五月から筑後掾病氣引退前の同年秋までとしておられる。傾聴すべき説であらう。

「曾根崎心中」の特別な扱いを同心中の一周忌と関連づけて考えれば宝永初年五月頃の刊行かと思われる。

(3) 「見取丸」（西沢版）大阪教育大学蔵

冒頭の見録番外に「南備一心五戒魂 かほる姫みち行」をのせているので、「一心五戒魂」上演直後の刊行であらう。「一心五戒魂」には義太夫正本があり初演は元禄十一年頃であるが、明和版「外題年鑑」は「新一心五戒魂 元禄十五年九月九日」上演とする。この「新一心五戒魂」は「一心五戒魂」の再演或いは改作をいうか不明

であるが、藤井紫影博士^{注9}の元禄十四年五月九日の石井兄弟の仇

討を仕組んだ「一心五戒魂切上り道中評判敵討」（竹本内匠太夫正本）があり、「一心五戒魂」が竹本座での切浄瑠璃の立浄瑠璃として上演されたことが知られる。又、加賀掾の正本に筑後掾のものと

同外題の「一心五戒魂」（元禄十六年十一月）があり、その板外が

新五……となつてゐることなのでこの当時の加賀掾の動静から筑後掾の後塵を拝したと思われ、元禄十五年九月頃の「新一心五戒魂」の上演は十分考えられる。なお、十二番目にのる「富貴曾我」には元禄十五年正月の正本が知られるので、これらを合せて「見取丸」の刊行は元禄十五年末頃と推定される。^{注11}

(4)「秘伝丸」（西沢版） 大阪大学忍頂寺文庫蔵

筑後掾門弟の名をのすが、竹本若太夫の名を入れる本と、その部分板木を削除し空白にしている本とが存在する。若太夫は豊竹座を旗上げた豊竹若太夫である。若太夫は元禄十六年には竹本座からはなれ櫓を上げたがうまくいかず、宝永二年から三年暮までは竹本座に復帰し筑後掾を助けていた。祐田善雄氏は早くこの点を指摘され所収曲との関係からもこの書の刊年を宝永三年か四年春位とされた。^{注12}しかし、「秘伝丸」の所収曲は「拍子扇」に類似し、序の「浄瑠璃口伝書」が「貞享四年義太夫段物集」（山本版）の「浄瑠璃Vの利用であること、前述の「拍子扇」「秘伝丸」（山本版）の関係からも「秘伝丸」が「拍子扇」を模倣した感がつよいこと。又、

目録の奥書にいうように「小菊丸」「見取丸」より後のものであること。以上の点から「見取丸」を元禄十五年末頃、「拍子扇」を宝永初年五月頃とするので「秘伝丸」は若太夫が竹本座にいた宝永二三年の間に出来たものとみる。若太夫の名を削除した本は若太夫が

再び豊竹座を興した宝永四年以後に再版されたものであろう。

(5)「小菊丸」（山本版） 京都大学類原文庫蔵

前述したように「小百番」との関係から所収曲によって刊年を知ることとはできないが、筑後掾の序の附与は西沢版「見取丸」「秘伝丸」刊行以後の出版であることを示唆する。「秘伝丸」刊行直後やはり宝永二三年頃に出されたのであろう。

以上五書について成立刊行年次を推定してみたがいずれも確証がなくやゝ不安な気がする。しかし、前章にみた山本・西沢両版の関係はこれらの年次推定に微妙な関わりを持ち、「小百番」（「小菊丸」）（調子竹）「見取丸」「拍子扇」「秘伝丸」「小菊丸」とした刊年年次の推定はこの考証においても保証される。又、これらの書は個別に成立刊年を推定した場合、背後の関係に目が届かず誤り易いので一括して取扱ったが、なお簡単に断言できない点があり今後の考証が必要であらう。さらに、この他に最初に列記したうち「連理丸」「花月丸」「極秘伝」の三書の考証もすべきであるが、これら三書は右の五書とは異った意味で懷中本の性格を表わしているので、以下の懷中本の流行の因を説く中で、それらの書についてふれていきたいと思う。

四

元禄末から宝永二三年頃にかけて前述した筑後掾の懷中本が流行した因の一つに、以前からの義太夫節の流行と共に義太夫節が着浄瑠璃としてもはやされたことが指摘できる。西鶴が『小竹集』に示した携帯の便利さがこの方面の利用に適したといえよう。『諸艶大鑑』（巻三ノ三）の「新町の暮をいそぐ風情」には、道行づくし

の浄瑠璃本とあるのは浄瑠璃の享受のうちその利用の方向を表わしている。西沢一風の『御前義経記』（元禄十三年刊）には「廓にて専らはやりし野郎山伏爰探しと申す肴浄瑠璃なり」（四ノ三）と廓で肴浄瑠璃を楽しむ場面がある。一風は浄瑠璃作者でもあり正本屋九左衛門は板元としての別名であり、こうした浄瑠璃の浸透していく有様に敏感であったはずである。当流である義太夫節が宴席の余興としてもはやされたことは他の浮世草子等からも推察できることである。吉永孝雄氏の解説^{注13}によると肴浄瑠璃という語は義太夫の

社会ではあまり使われていないとされる。テクニカルタムとしての肴浄瑠璃は存在しないかも知れないが、しかし、遊宴の場で座興に演じられるものを肴——と称することは既にあり、酒席の慰みであればさかなとする発想もある^{注14}。もともと、最初は場を限定していた語でも利用範囲が拡大されれば必ずしもその限定は必要としない。肴浄瑠璃の語も特別な場を限定することなく普通名詞として用いられている。そして、「傾城請状」などが最も人気を持ち、浮世草子『傾城請状』（元禄十四年七月）を初め様々な方面でそのやつし^{注15}が現われている。なお、厳密には「さかな」と「やつし」は区別されるべきで、やつし語本「乱曲扇拍子」（宝永四年）に「罷出て御さかな仕らんとせきはらいしてこゝを大しとうたへともたれかはなにもきかす誉もせぬハわらひもせずさらにやつしてみんと酒屋の藤次良たるつたと名のつて」とあるように、宴席の余興としてが「さかな」であり「やつし」は本来の詞章を時宜よくかえる方法である。故に後に述べる略浄瑠璃と肴浄瑠璃は用途は同じであってもその内容は異なる。略浄瑠璃は肴浄瑠璃の一種であるが詞章がやつされており肴浄瑠璃は義太節の詞章そのままである。「花月丸」惣目録奥書に

「右之内十一ばんハやつしさかな上るり／なりかたり様本間の道行けいごとの／ふし付にかはる事なし」とあるのはこの間のことに留意した注意書きである。

これらの懐中本がその刊行の意図の一つに肴浄瑠璃への利用ということがあったことは、「小百番」が「酒中浄瑠璃之事」という目録曲とは別項目で「神道ひみつの巻・五戒魂北山名所・ねの日の遊・くはんじんちやう・宇佐八幡ぐはん書」の七曲を設けていることによつていえる。これら七曲が何故とり出されたか不明だが、その流行が無視できないものになっていたことが窺える。豊竹若太夫正本「心中涙の玉井」（元禄十六年七月頃上演 正本屋九左衛門板）に「此間に肴上るりにて八けいあれ共りやすく」といった一文が枠に囲まれ細字で割書されて出ている。お初と久兵衛が駈落を決意した直後、お初久兵衛河内参道行の直前にである。酒宴の場面でもなく、「涙の玉井」の一場面とするなら劇的緊張という点からその破綻は大きい。間狂言に流行の肴浄瑠璃がなされたと思われる。「八けい」とは「いつくしま八景」であろう。「いつくしま八景」は金平浄瑠璃「源氏筑紫合戦」五段目にあり、一風の「今昔操年代記」にいう井上播磨掾の代表的な節事である。「小百番」にも酒中浄瑠璃とされ「色里迦陵頻」（西沢九左衛門板）といったはやり唄を扱ったものにも「うつくしの八景 義太夫ぶし」とやつしにされあげられている。当時最流行の肴浄瑠璃の一つである。舞台上演の間のものに演じられるまで肴浄瑠璃が流行していたことが知れよう。逆にこうした劇場関係者の時流的なサービス精神が肴浄瑠璃の盛況を招き懐中本の需要を煽ったともいえるよう。そして、こうした状況を反映して前述の山本・西沢間の問題も生じてきたと思われる。だが、山本

側では「小菊丸」の序で他板を批難したことで一応の解決をみたしたのであるうか。その後懷中用段物集は『鸚鵡ヶ袖』の翌年出した『鸚歌ヶ袖』（正徳二年九月）まで寡聞にして知らない。一方、西沢では、現在その所在不明のものを含め竹本一流懷中本と称する一連のものを続刊している。しかし、現存の「連理丸」「花月丸」「極秘伝」をみる限りではその企画には行き詰りが感じられる。

「連理丸」（東京大学霞亭文庫蔵）は「恋慕段物揃」と銘うって「淨るりの眼^{まなこ}」を標榜している。これは筑後、豫段物集に加えて恋慕揃という、他の段物集が眼目とした道行節事とは異った、特色を附与したとみれる。この「連理丸」所収段物と最も幅広く筑後豫の段物を集めている『鸚鵡ヶ袖』のものとを比べてみるに、一段そのまま入れられた「曾根崎心中」を除くと重なり合う段物がない。他の懷中本では「小百番（小菊丸）」は二十四番中十七番、見取丸は二十七番中二十五番、「拍子扇」「秘伝丸」は二十八番中七番（「曾根崎心中」は除く）と『鸚鵡ヶ袖』とはかなりの共通する段物がある。他の段物集と比してこの「連理丸」の選曲は異例といえる。横山正氏が論じられたように恋慕表現の発達意識^{注17}下のもとに位置づけることができても、又、劇の内容に立ち入ってみようとする姿勢は評価されても、従来の段物集からすれば奇を衒い過ぎていゝといえよう。「小菊丸」「見取丸」「秘伝丸」と段物の多くが所収された後で、新しい段物集をつくるにはかなり思い切った編集が必要であったのではなからうか。十五番しか所収しないのも他の懷中本に比してあまりにも少ない。又、「曾根崎心中」を丸一段のせることにより一冊としての体裁を保っているが、それにも「拍子扇」の影響が考えられる。「連理丸」の刊行を横山正氏は『曾根崎心中』初演と同時

またはその直後^{注17}とされているが、「連理丸」にのす広告には「秘伝丸」の名が「前々よりひろめ置候物」としてあるに對して、「秘伝丸」にのす「ひろめ置申候懷中けいこ本」の広告の中には「連理丸」の名はない。つまり、「連理丸」は「秘伝丸」刊行後のものであり、「秘伝丸」の刊行を宝永三年とする今、「連理丸」は宝永三年頃刊となる。「拍子扇」が「秘伝丸」に先行することは既に述べたので、「曾根崎心中」についても「拍子扇」の模倣を考えなければならぬまい。さらに、「拍子扇」にある「曾根崎心中」は「連理丸」のように「死出の道行」と題せず、道行部分を分離しない「元禄二八のほし初秋すゑの八日」の筑後豫序や近松序をもつ六行本「曾根崎心中」（山本版）に近い点からも、その所収時の早さが推察される。「連理丸」の恋慕揃は山本の亜流から抜け出ようとした結果というより段物集としての選曲の困難さが招いた苦肉の策でなかったかと思われる。この傾向は後のものに一層濃厚に現われている。

「花月丸」は従来紹介されていないので詳しく論じるべきであるが、それは別の機会に譲り必要なことのみにとどめる。「花月丸」になれば最早それだけで一書の体裁を保つことができなくなってきたようである。前の「連理丸」にしても十五番とその番組は少なく「曾根崎心中」を丸一段入れることによって独立した一書の体裁を辛うじて保っていた。ところが、「花月丸」になると「花月丸」「御酒中淨瑠璃」（内題）「竹本略淨るり」（奥附）の三種を合わせ目録のみを整えた寄本になる。この「御酒中淨瑠璃」「竹本略淨るり」は次に述べる「極秘伝」にも合本されており、「略淨るり」は（略二二十八）の丁附を持ち、「連理丸」広告の「略上るり」の一部でなからうかと思われる。「略上るり」は合綴され『色里迦陵頻』にも

含まれている。「御酒中浄瑠璃」「略上るり」については単行として以前の刊行が十分考えられその刊年推定は困難であるが、「花月丸」(十一番所収)は冒頭曲が「傾城八花形」であり、又、最新曲として「男色加茂侍」が所収されていることから宝永初年以後が先ず考えられる。さらに、「連理丸」にのす広告に「花月丸」の名がみえないことを合わせ考えれば「連理丸」刊行後、宝永三年頃でないかと思われる。そして、その選曲の苦心の程は「烏帽子折 二段目うれい」「虎稚物語 三段目ふし所」と従前の段物をとらずその曲の聞き所を見出してくる点にみれる。そこには「連理丸」の恋慕摘と共に西沢一風の見識がみられるが、既に筑後掾の語り物は現存の懷中本で外題にして四十五種段物数百二十二番に至ってはこの工夫も新曲を待たねばならない所にまで来ている。この後に出た「極秘伝」はこの行き詰っていく有様をよく示している。

「極秘伝」(天理図書館蔵)は原本未見のため結論は控えるべきだが、信多純一氏より序の部分の写真、角田一郎・馬場憲二氏より所収段物・丁附等の記載ノートを拝借しほぼ内容を知ることができた。「極秘伝」が寄本であることは既に指摘されているが、正に既に出た懷中本の寄せ集めである。「曽根崎心中」の観音廻り・道行は「連理丸」より、「御酒中浄瑠璃」「略上るり」は前述の「花月丸」との同板といえる。なお、序は「極秘伝」の名にふさわしくするため新たにつけられたものであるが、その内容は「小百番」の八浄瑠璃凡例Vをそのまま流用したに過ぎない。「筑後掾伝受丸」と称しはしているがその内実は西沢が今迄刊行してきた懷中本の終局を示すかのように、「花月丸」のような統一した目録もない継ぎはぎの間に合わせ本である。なお、「花月丸」にいう竹本一流懷中本に名

がみえない点からして、又、「花月丸」の「御酒中浄瑠璃」「略上るり」と同じものを持つなどから「花月丸」刊行直後に出たと思われるが、宝永年間(三・四年頃カ)としか年次を規定できない。ただ、「花月丸」「極秘伝」にしても着浄瑠璃のためのみの段物集とみた場合、その企画は評価されようが、寄本であることによつて、又、筑後掾との関係をことさらにみせようとする所に逆に安易な編集態度がみられる。竹本一流懷中本と称する限りは筑後掾を標榜するのは当然ながら、そのことが却って行き詰りとなっていたようである。しかし、同時に、こうした懷中本に対する需要の多さがこの刊行を支えたとみられ、この辺りに以後命脈を保つ義太夫節の底力を見るような気がする。

五

「花月丸」の借覧を機に竹本一流懷中本について述べてきたが、同種同体裁の懷中本であっても板元によりその刊行事情が異なり、一律に扱うことに問題があることがわかった。従来この問題を等閑視してきたのは、この当時の書肆間の規約・契約等の資料がない事と山本・西沢が共に正本屋であった(山本の方が老舗)ためと思われるが、その正本屋であることが特定の太夫の正本刊行という(山本なら筑後掾、西沢なら越前少掾)結び付きがあり、却つて他の太夫のものには非力であることがいわれており、前述のような状況を態することは十分推察されることであつた。^{注20}しかし、何よりも強調されなければならないのは、この山本・西沢間の問題は懷中本の基点に西鶴が享受者の立場をあげつらつたと同じく、二書肆間の競合を煽る需要があつたということであらう。それは義太夫節の人氣とい

うことになろうが、その人気をうまく利用した西沢一風の商魂も賞されるべきであろう。そして、竹本一流懐中本の横小本の小書を通して、段物集はそれを語った大夫のためのものでなくそれを愛した者達のものであることを感じるのである。この浄瑠璃愛好者の地盤こそ、加賀掾・筑後掾といった名人なきあとの浄瑠璃界の盛況を支えつなぐものであったと思われる。この竹本一流懐中本に現われた状況はそうした形に現われない浄瑠璃に対する一般の愛好を知る格好の資料でなかったかと改めて思われる。

注1 『演劇百科大事典』△浄瑠璃段物集▽解説

注2 貴重図書影本刊行会『小竹集』複製解説

注3 『新小竹集』は豊竹山城少掾旧蔵本(焼亡)の写真しかみることができなかったが、節・地の解説は『竹子集』から転載しており、その字配りからして小本体裁と思われる。『新小竹集』の名もそれを示しているよう。『千尋集』共十五番所収は『小竹集』と同じである。なお、『千尋集』も如水序とあるだけで義太夫が直接関与した形跡をみないのは『小竹集』と同様の事情を示すと思われる。

注4 元禄末頃には横小本形式が流行したのか、歌謡・歌舞伎評判記・浮世草子等にこの種の体裁のものが多々みられる。

注5 『秘伝丸』には△竹本宝鑑・浄瑠璃見取丸・同小菊丸・竹本二朱一部▽の四本、『連理丸』には△見取丸・小菊丸・秘伝丸・二朱一部・竹本宝鑑・浄るり大鏡・略上るり▽が載る。

注6 合本された「略上るり」「御酒中浄瑠璃」をみるが丁数よりみて抄出なのでここでは省いた。

注7 祐田善雄「近松年譜」(『解釈と鑑賞』S40・3)

注8 『甘露堂文庫 稀観本放覧』(浄瑠璃拍子扇) 備考

注9 「道中評判敵討について」(『江戸文学叢説』所収)

注10 信多純一「宇治加賀掾年譜」(『加賀掾段物集』所収)。なお、信多純一「近松世話浄瑠璃の方法―心中物を中心として―」(『帝塚山演劇学』第二巻一号)には高野正巳氏が「新一心五戒魂切上るり」と内題右肩にある「道中評判敵討」の筆写本所持のことを記してある。

注11 「見取丸」については「調子竹」との関連が考えられ、「調子竹」にも「かほるひめ道行」が載っていることになっているためその所収のされ方が問題となる。しかし、その所在不明な今、その点については不問にしておく。ただ、「調子竹」「見取丸」の刊行時期はほぼ同じ頃と思われるので「増補 一心五戒魂」を根拠として強調しても左程のずれはないと考えられる。

注12 祐田善雄「竹本座と豊竹座」(『上方』一二一号所収)

注13 『演劇百科大事典』△有浄瑠璃▽解説

注14 安原貞室の「かたこと」(慶安三年一六五〇)に「さかなといふところは(中略)又酒の慰みといふ下略歟」とある。

注15 長谷川強「浮世草子の研究」第一章七四頁

注16 「日本歌謡集成巻八」に翻刻されている「色里迦慶頼」は底本が目録半丁を欠くため内題をもつてこの部分は目録とされているが、大阪大学忍頂寺文庫本は目録が完備しており「義太夫ふし」と明記されている。

注17 横山正「操浄瑠璃芝居の研究」

注18 早稲田大学演劇博物館には抜き本として「略上るり」のみが蔵書されている。

注19 長友千代治「錦文流年譜」(『佐賀大学文学論集』五十七号)

注20 山本とも子「曹根崎心中」の諸本(『近松の研究と資料』第二所収)懐中本についてこの適用は懐中本の成立事情からみて問題はあるが、

注21 一応の考察の目安とはなろう。なお、「御酒中浄瑠璃」の奥書に「懐中本根元 大坂上久宝寺町三丁目 正本屋九左衛門板」とあり、「懐中

本根元」の語が目につき懷中本については別の事由があつたかとも推察される。

(付記)

本稿を成すにあたって「花月丸」を貸与下さった信多純一先生より受けた学恩は多大でその御指導を得た点も多い。又、横山正先生からは多くの段物集を拝借し、その上観る機会を与えて頂きこの論稿の基礎固めをすることができました。二先生にありがたうお礼申

し上げます。さらに祐田善雄・角田一郎・中村幸彦諸先生を初め富士昭雄・馬場憲二・井口洋各氏には直接に間接に多々御教示頂き又資料のことでお世話頂きました。ここに記して厚く感謝申し上げます。関係図書館にもいろいろお手数をおかけしました。末筆ながら厚くお礼申し上げます。なお、本稿の一部は昭和四十八年度秋季日本近世文学会研究発表会で発表し、野間光辰先生からも御教示を得ました。ありがたうお礼申し上げます。

(大阪松蔭女子大講師)